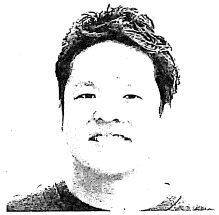
（第３種郵便物認可）　神戸新聞　2023年（令和

見る　思う

株式会社アグリヘルシーファーム社長　原 智宏さん



仕事も休日も、農業を立派な産業に

農業に就いて23年目になります。就農当時、「職業は農業です」と言っても、伝わってないなと感じていました。近所の人も悪気なく「偉いね、よく手伝って」という調子。何とかもうけてやろうと、農繁期は休日もろくに取らずに働きました。

農家の高齢化とともにうちの農地は増える一方です。雇用も始め、4人で作業していた約10年前、休日は農閑期に集中し年60日ほど。それが当たり前だと思っていました。農業を立派な産業にしたいと意気込んでいたのに、労働環境の悪さに目が届いていませんでした。「僕たちの楽しみは休日や給料」「豊作とか、会社のもうけに興味はない」。社員に言われて目が覚めました。同じ考えだと思っていたのでショックでしたが、そこから社員の仕事も休日も充実させたいと思うようになりました。

今、休日は年108日、有休も用意します。それでもちゃんと農業ができて収益を出していきたい。働き方を考え、農繁期は毎月の休日に上限を設けてシフトを組んでいます。終業時間も午後5時半までを基本に夏は同6時まで、冬は同5時まで。（最新技術を活用する）スマート農業を取り入れ、できるだけデータを取って無駄のないようにしています。

社員は、作業員ではありません。毎朝のミーティングでは、全員でその日の全ての作業を確認します。計画するのは、就農10年になる31歳の農場長。日々の作業やその結果をきっちりまとめてくれます。主に育てるのはお米と黒大豆。どちらも年1作。まだまだ未熟な集団ですが間違いなく成長し、組織として仕上がってきていると感じています。

農業を取り巻く環境は決して楽ではありません。原油や資材の高騰に伴う価格転嫁は難しいと言われ、経営を圧迫しています。弊社は農産物の大半、お米は全量を家庭や飲食店、ホテルに直販しています。今年5月に商品を値上げしました。違う品種を提案した先はありましたが、取引がなくなることはありませんでした。品質や値段などで築いてきた信頼と、農業者からお米を買うことへの理解を感じることができました。

利益を上げるには、収穫量を増やす▽単価を上げる▽コストを下げる―の三つの方法があります。人件費は削れません。農薬や化学肥料を減らし、牛や鶏のふんなどの有機物を使う。作業工程を減らすため、田植えに代えてもみを直接まき、必要な機械を導入するといった具合です。

弊社をもっと知ってもらうため、おにぎりを作って販売するキッチンカーを導入する準備を進めています。SNS（交流サイト）で発信するつもりで、反響も楽しみです。

さまざまな取り組みで仲間は増え、役員と社員を合わせて10人になりました。まだまだ他産業に追い付いたとは思っていません。普通に農業法人で働きたいと思ってもらえ、社員をきっちり支えられる農業界になってほしい。社員が働いてよかったと思える会社づくりは続きます。

はら・ともひろ　1978年丹波篠山市生まれ。2001年姫路独協大経済情報学部を卒業し父親の下で就農。同年12月に農事組合法人を設立。07年から代表理事。19年株式会社に改組し、代表取締役に就任。